

平成 23 年度研究成果情報

課題名：大浦マガキ養殖の現状と対策について

[背景・ねらい] = 現状

佐賀県太良町大浦地先では、マガキの垂下試験養殖が平成 13 年度から開始され、平成 16 年からは本格的に養殖が開始された。しかし、豊凶の差は激しく生産は不安定である。生産不安定要因は 8～9 月にかけて発生する大量斃死とその後の成育不全であり、原因究明とその対策が望まれている。

[成果の内容・特徴]

(1) カキ養殖垂下連の水深帯毎に生残率、収量、付着生物量を調査したところ、生残率と収量は垂下水深帯が浅いほど低かった（図 1、図 2）。

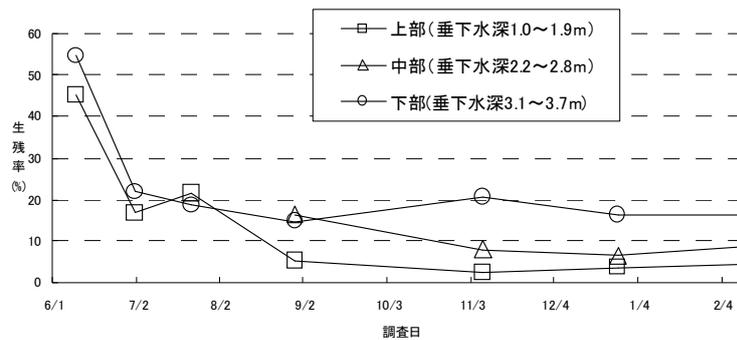


図 1 垂下水深帯と平均生残率の推移

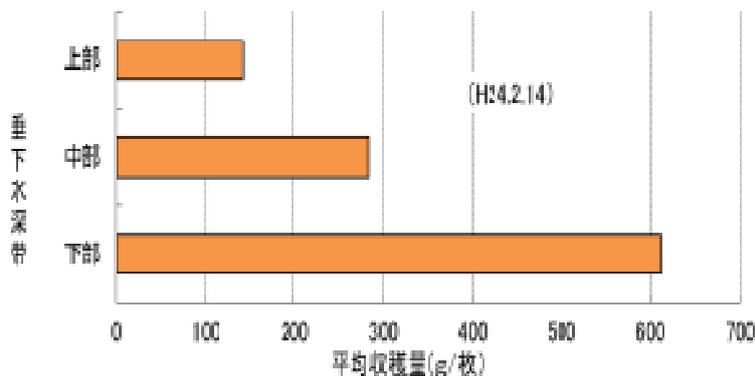


図 2 垂下水深帯とコレクター 1 枚当たりの平均収量との関係

(2) 垂下水深が浅い層は水温が高い（図 3） ことに加え、付着生物量も多く、特にフジツボ類の付着が大半を占めた（図 4）。大量斃死には、高水温と付着生物の大量付着が密接に関わっていると推測された。

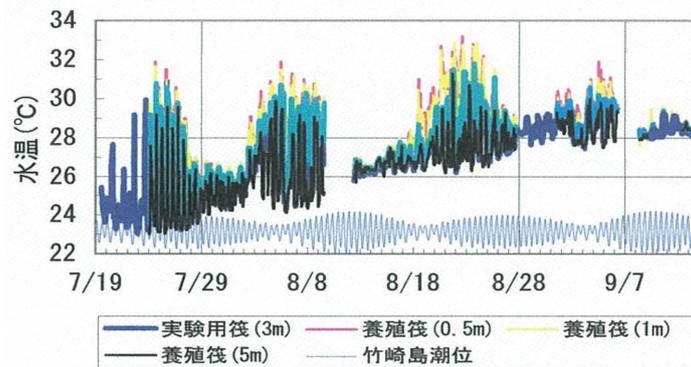


図3 養殖筏の水深毎の水温の推移（出典 芙蓉海洋開発(株)）

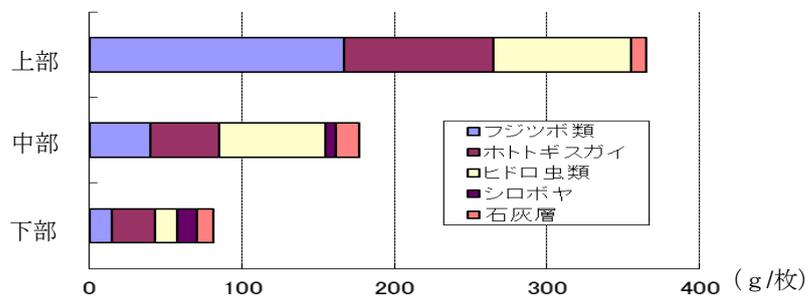


図4 垂下水深帯とコレクター1枚当たりの付着生物量との関係

[成果の課題・問題点]

- ・ 大浦のカキ養殖筏の水深は 10 m 未満で浅く、他県で実施されている 10 m 以深の深吊りによる高水温や付着生物の対策はできない。
- ・ 貧酸素対策については未確立。

[今後の対応]

- ・ 大量斃死が終息する 9 月末まで主に下部（水深 3.1～3.7 m）における試験養殖を行い、9 月以降に一部を上部（水深 1.0～1.9 m）に移行し、収量等について検討する。
- ・ 夏季の大量斃死のリスクが少ないとされる潮間帯を利用した試験を 9 月頃まで実施後、9 月以降に垂下養殖に移行し、有効性について検証する。

[その他]

研究期間：平成 23～24 年

研究担当者：普及担当 古川 泰久